

< 2005年度の講義 >

1. 自然神学とその再構築
  2. 「宗教と科学」関係論の基礎
  3. 現代の環境論とキリスト教思想
  4. 現代の生命論とキリスト教思想
- 展望 - 自然神学の可能性 -

## 展望 - 自然神学の可能性 -

(1) 自然神学のまとめ

### 1. 広義と狭義の自然神学

- ・ 自然的理性による（啓示に顕わには依拠しない）宗教的な認識・知識  
キリスト教外部に対する弁証とキリスト教内部における論争

異教と異端

コミュニケーション的合理性

他者との対話可能性

神学と諸科学との媒介

- ・ 自然を通しての神認識（自然的理性による）  
神の存在論証、デザイン神学

- ・ 広義の自然神学の特定の歴史的状況における具体化としての狭義の自然神学  
その都度のコンテクストにおける新たな具体化の可能性

### 2. 形而上学の役割

- ・ コミュニケーション合理性の基礎付け

神学との接点は「創造」

被造物とありかつ自然

自然的理性と自然

- ・ 広義の自然神学の基礎となる広義の形而上学と狭義の自然神学の基礎となる狭義の形而上学

広義の存在論と狭義の存在論

ギリシャ的な存在論に対する聖書的な思惟の明確化においても、存在論という用語を使用せざるを得ないというジレンマ、別の仕方の存在論

聖書的な存在論

人格的な存在論

ギリシャ的伝統に基づいて科学という用語を使用する限り、諸学の基礎論に対する名称は、存在論あるいは形而上学となる

- ・ 東アジアの状況における「自然神学」とその基礎付けはいかなる仕方で遂行できるか？

### 3 . 自然神学から公共性へ

- ・ 神学から諸科学
- ・ キリスト教から諸宗教
- ・ コミュニケーション合理性は、公共性論を要求する

Alister E. McGrath, *The Science of God. An Introduction to Scientific Theology*,  
T & T Clark 2004

They(These elements of a scientific theology) are seamlessly intergated to yield a coherent vision of the theological enterprise, and a justification of its exsistence and methods in the face of modern and postmodern criticisms and anxieties.

The distinctive feature of a scientific theology is its critical yet positive use of the natural sciences as both comparator and helpmate for the theological task, seen against the backdrop of the intellectual engagement with reality as a whole. (12)

Christian theology is here conceived and presented as a legitimate coherent intellectual discipline, with its own sense of identity, place and purpose. A unitary understanding of reality ... they should accomodate themselves to the distinctive natures of those aspects of reality which they attempt to represent and depict.

This leads to one of the major themes of the vision that lies behind a scientific theology --- my deep longing to develop a *public* theology, capable of interacting with other disciplines on its own terms. A public theology is able to stand its own ground, while engaging in dialogue with others. (13)

#### ( 2 ) 公共性論へ

- ・ 環境論：近代における社会的欲望の肥大化  
資本主義的市場経済メカニズムの問題
- ・ 生命論：遺伝子差別、商品化という問題点  
市場経済という背景
  
- ・ 「宗教と科学」関係論における現代の倫理的問いは、経済への反省を要求する  
別の文明形態を目指して  
カブ
  
- ・ 公共性の再構築  
世俗化の帰結の捉え直し

John B. Cobb, Jr., Christianity, Economics, and Ecology, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press 2000, pp.497-511

## 1. 新しいコンセンサスと現状

状況 (497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス
- ・現実にはほとんど変化を生じていない。

歴史・問題の根 (497/3-499/1)

技術 / 経済 / エコロジー (499/2,3,4,5)

- ・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける  
economy (oikos + nomos) / ecology (oikos + logos)  
家の実践的な秩序付け                      家の構造

- ・科学技術の主要な機能

自然的なものを人工的なものへと変形すること。この点でエコロジーと緊張関係に立つ。しかし、エコロジーは科学技術を排除しない。

- ・農耕と牧畜において、人間の技術は自然の部分であることやめる
- ・技術は人口増加を可能にした  
地域的・局所的な破壊から、グローバルな破壊へ

## 2. キリスト教の問題性と課題

キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか (499/6-501/1)

1. 科学技術は貧困を縮小する (必要なものを生産し雇用を創出する = 豊かにする)

これは経済学者の目標であり、キリスト教徒はその自然な支持基盤となる

2. キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性

物質的な必要を満たすという目標の共有

3. 人口増加・人口爆発

伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視、医学の進歩

人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること (501/2-503/1)

1. 科学技術のあり方の転換

これまでの科学技術は、労働力が少なく、資源と汚染処理スペースが豊富であった時代のものであるが、現在状況は反対になった。

より少ない資源によって十分に有用な商品を生産すること

この点で、現在の科学技術には多くの改良の余地があり、キリスト教徒はこのシフトに躊躇なく賛成できる

破局に至らない生産の増加、持続可能な発展

2. 個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること

3. 資源の再利用・リサイクル

- 使い捨てスタイルからの脱却 / 修理する
4. 食物などの農産物の持続可能な形式の発展  
一年生穀物を多年生穀物に代える
5. 食生活習慣の変化による土地利用への影響  
土地の適した利用 (食肉用動物のための牧草地、穀物生産 人間が直接消費する)  
現実には、多くの牧草地が穀物 (家畜用) へ転換されつつある  
食肉は、牧草で飼育された動物に制限するという変化
6. 古代キリスト教の徳の復興  
他者の幸福のために自分を犠牲にする 消費者志向社会からの撤退  
他者：この地球に共に生きる生きた被造物すべて  
すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること  
収入と富の再分配についての公共政策の支持

### 3. 政策レベルの問題とキリスト教

#### 税政策の転換 (503/2-504/2)

##### 1. 逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ

資源税：貴重な資源の使用に税を課す

汚染税：汚染処理の社会的コスト

この結果、

通常のエネルギー資源を少ししか使用しない住宅や都市の建築、修理とリサイクルが、好ましい選択となる。

こうした動きに対する異論：貧しい者はエネルギーや資源を買う余裕がない

しかし、この税制の転換によって、一般に貧しい者の負担は軽くなる

所得税の元来の意図は、富の再分配であり、税の再分配的使用は可能である

これは国民的意志を必要とする

##### 2. 建築や改築を無税に土地にのみ税を課す

土地投機を抑制し、有効利用を促進する

土地の利益は共同体全体に属している (ヘンリー・ジョージ)

土地税を上げて、他の税を軽減する

#### 税と予算による人口増加への抑制効果 (歳入歳出政策) (504/3,4)

資源税と土地税によって、引退後の安定を確保するための基金を作る

急激な人口増加が続く国々では、女性の地位の向上がもっとも重要

人類は持続可能な使用の限界をすでに超えてしまった。人口増加 (総人口) と一人あたりの消費の不必要な増加とを、抑制しなければならない。

### 4. 経済成長とキリスト教

キリスト教徒は支配的な経済的实践と理論とを批判しなければならない (504/5)

経済成長至上主義を断念すること

成長自体とそれを達成する政策との区別 (504/6-506/2)

経済的成長自体はエコロジーの敵ではない

成長志向的な政策

放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別

キリスト教の目標はすべての人々が良き（快適・健全な）生活のための物質的手段を持つこと

人口増加      大量の生産      総体的経済成長の必要

最も劣悪な貧困の形態における増加を伴う

世界銀行の立場：貧困の減少は総体的な経済成長の文脈でのみ可能になる

ソビエト崩壊後、多くの国家はグローバル市場へと組織され、その外部の貧困の減少は、権威主義的方法（キリスト教的に受け入れ難い）でなされている。

成長志向的な政策と権威主義的な強制のいずれにもよらない貧困の克服の例

(506/3,4,5,6)

インドのケララ州の場合：女性による女性の教育、モデル的な価値

## 5. キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

神学の悔い改め

人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること

社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

信仰を公共の政策に関係づけること、諸神学運動の成果をエコロジーの問題と関係づけること

教会に対して、地球を荒廃から救うために必要な変化についての真剣な反省を促すこと

従来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと(507/4-508/6)

家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、

現実の経済活動がこの規則に合致すること

これらの条件のもとで、人類は他の種とともに持続可能な仕方で繁栄できるエコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される

1. 経済的人間を共同体における人格として再考すること

共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする

生産と消費の増大が共同体を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない

2. 経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない

他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である

### 3. 共同体は未来へと広がっている

続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない

### 4. 共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値と同様にそれ固有の価値を持つ

### 5. 被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える

種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する

均質化の傾向は終わらせねばならない

### 6. 科学技術をエコロジカルな仕方で適切なものとする

人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用

### 7. 神はすべての被造物に配慮している

苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性

## 6. グローバル化における経済と政治 (508/7-510/1)

グローバルな経済についての議論の必要性 (508/7)

- ・ 地域経済の強調、必要なものの多くをその地域で生産すること

交易することの自由と交易しないことの自由

- ・ 経済的な自律性は有意味な政治的自律性を可能にする (509/2)

しかし、地域の政治的自律性は絶対ではない、水利用の問題

- ・ 共同体の共同体を構成すること（広域的な共同体） (509/3)

経済的な自己充足性の度合いはこのレベルでより大きくなる

- ・ 国際連合 (509/4)

補助的であるという原理、機能強化の必要性

- ・ 現在、政治的秩序には経済的秩序に対して奉仕することが期待されている (509/5)

多国籍企業や国際機関（IMF, WHO, 世界銀行）への権力の委譲

- ・ 経済関係の国際機関を強化された国連に従属させること (509/6)

方向を変えるということの一つの目標は、経済的秩序を政治的秩序のコントロールに引き戻すこと。普通の人間がそこで生きる規則の形成に参加することを可能にする。

## 7. キリスト教 - 失敗と課題 - (510/2,3)

「われわれ西洋のキリスト教徒」 (510/2)

信仰は愛の純粋に個人主義的な表現を越えて社会分析、社会倫理へと進むことを要求する。

新しいヴィジョンを求めて (510/3)

われわれの失敗は、キリスト教信仰本来のものから帰結ではない。それは、むしろ、過去2世紀を特徴づけてきた思惟の分裂の進行を我々が受け容れてきたことの帰結である。いわゆる「専門家」を恐れすぎ彼らの前提を吟味するのに控えめすぎた。一切のものは相互に関連し合っており、エコロジーと経済学との区分別を突破する機会と責任がある。

この惑星における人間の存在の仕方（持続可能なだけでなく、再生的な）へと社会全体を向かわせ得る新しいヴィジョンを提供するように求められている。